様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月７日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520468
研究課題名（和文）
中国語および韓国語を母語とする日本語学習者の共起表現の習得に関する比較研究
研究課題名（英文）
A comparative study on the acquisition of collocational expressions by native Chinese and Korean speakers learning Japanese
研究代表者：
玉岡　賀津雄（TAMAOKA, Katsuo）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：70227263

研究成果の概要（和文）：
日本語学習者の総合的な日本語能力および共起表現のテストを作成し，これを中国の西安外国語大学で日本語を専攻とする学生(3 年生と 4 年生)に対して実施した。このデータを構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling: SEM)の手法によって分析した。その結果，慣用句には語彙知識の影響が認められた。それに対してオノマトペは語彙とは直接の影響は見られず，慣用句の影響が見られた。つまり，語彙→慣用句→オノマトペという順序での影響関係が見出された。この成果は，研究代表者が主催となってワークショップを実施し，構造方程式モデリング (SEM) の手法・知見を日本語教育関係者および日本語学習者と共有した。また，一連の研究成果を，日本語教育学会，第二言語習得研究会，日本言語科学会等で発表した。また，日本語学習者による共起表現の習得状況を明らかにするための基準として実施した日本語母語話者における共起表現の使用状況についての調査結果は，論文にまとめ日本言語学会の査読付き学術誌である『言語研究』に採択された。

研究成果の概要（英文）：
We conducted tests of general Japanese ability and collocational expressions on 2nd and 3rd year native Chinese speaking university students studying Japanese. Test data were analyzed by a statistic technique of structural equation modeling (SEM). The results showed the causal relations of acquisition from lexical knowledge via idioms to onomatopoeia. We organized a workshop related to the SEM technique to share the results of this study with teachers and students involved in Japanese language education. A series of these collocation studies were presented at various academic conferences such as Japanese language education, second language acquisition, and Japanese language sciences. A research paper on collocational frequencies of onomatopoeias and verbs used for constructing test questions for non native Japanese learners has been accepted by a refereed journal *Gengo Kenkyu* published by the Japanese Linguist Society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：オノマトペ，中国語母語話者，共起表現，慣用句，日本語教育，韓国語母語話者

１．研究開始当初の背景
日本語学習者の言語習得に何が最も貢献しているかについては，多くの関心が寄せられている。研究代表者は，本研究課題に着手す

る以前に，構造方程式モデリング(SEM-Structural Equation Modeling; 以下，SEM とのみ記す)による分析で，中国語および韓国語を母語とする日本語学習者の日本語能力の因果関係を明らかにした(Tamaoka, Miyaoka, Lim, Kim & Sakai, 2007)。それによると，中国語母語話者においては，語彙知識が，２つ以上の文からなる談話の理解(因果関係，意図的表現，照合判断の３領域で測定)に強く影響していることが明らかになった。一方，韓国語母語話者は，文法が日本語と類似しているため文法と語彙の両方をバランスよく利用して談話理解を行っていることが分かった。しかし，慣用句やオノマトペといった共起表現は，語彙と文法の両方の要素にまたがって機能している。それでは，共起表現の習得には，語彙と文法のどちらがより強く影響しているのであろうか。この点について，本研究課題では中国語母語話者と韓国語母語話者を対象に比較研究を行うことにした。

２．研究の目的

本研究は，中国語母語話者と韓国語母語話者の日本語学習者を対象として，まず語彙と文法の知識のどちらが共起表現の習得に強く影響しているかを明らかにした上で，共起表現の理解が総合的な言語理解(聴解と読解)にどのくらい貢献するかを明らかにすることを目的としている。共起表現として，本研究では慣用句とオノマトペの二種類に焦点を置くこととした。

共起表現は，句構造を作るという意味で文法的な要素を持っている。しかし同時に，特定の名詞と動詞が共起しなくては意味をなさないことから，一種の熟語としての語彙的な要素も兼ね備えている。例えば，慣用句の「目を盗む」や「手を抜く」は，「目」と「盗む」，「手」と「抜く」が共起してはじめて慣用句の意味になる。したがって，日本語学習者はこのような共起表現を，文法構造を理解した上で一種の語彙として暗記する必要がある。オノマトペを含む「雷がごろごろ鳴る」と「雨がしとしと降る」であれば，主語・オノマトペ・動詞という３つの句から構成されている。しかし，この２つの文のオノマトペを入れ替えて「雷がしとしと鳴る」，「雨がごろごろ降る」と言うと，誤った表現になる。これは，オノマトペが，共起制限が強いためである。この共起制限の強さは，日本語の文理解において，次にくる表現を予測する手助けとなっている可能性がある。

日本語には，中国語から借用された漢語で構成される共起表現が多い。中国語母語話者にとっては，母語における漢語の知識が，この種の共起表現に有利に転用されると予想される。一方，韓国語母語話者にとっては，漢語的表現は馴染みのあるものが多い(李，2007)とはいえ，母語で漢字を用いることはほとんどない。そのため,漢語に関する共起表現での転用は起こり難いであろう。結果･様態の副詞は，ほとんどが和語であるが,日本語と文法体系が類似している韓国語でも類似の共起表現が用いられる傾向があるので,韓国語母語話者の方がより習得しやすいのではないかと思われる。オノマトペの表現は,擬声語･擬音語･擬態語であるため,学習者の母語がすぐに影響するとは考え難い。こうした学習者の母語と日本語との類似性や相違点からくる日本語の共起表現の習得との関連を明らかにすることにより,学習者の母語に応じた日本語の共起表現の習得に関するカリキュラムの構築に貢献できるはずである。

３．研究の方法

まずは日本語母語話者による共起表現の使用の実態を調査し，それに基づいて学習者の使用状況を比較することにした。日本語母語話者については，コーパスと広島経済大学の学生に対して実施した調査に基づいて，オノマトペの使用状況を考察した。その際，曖昧性を示す‘エントロピー’と一貫性を示す‘冗長度’を指標として，共起表現の特徴を示す。予備調査として，30 種類のオノマトペについて，それぞれ 30 秒で思いつく動詞を書かせる調査を 12 名の大学生に行った。

日本語学習者の調査にあたっては，語彙知識・文法知識・読解能力・聴解能力という総合的な日本語能力および共起表現のテストを作成し，これを中国の西安外国語大学で日本語を専攻とする学生 (3 年生と 4 年生) に対して実施した。

本研究では，共起表現として，慣用句，オノマトペ，結果･様態の副詞の３種類を選ぶ。

慣用句については，「頭が切れる」「山をかける」など，一般的によく使われているものを計 40 種類選択した。これらの慣用句に使われている名詞は，すべて日本語能力試験２級から４級までに配当されているものに限定するため，本研究の被験者にとって馴染みのある単語である。したがって，慣用句を構成する個々の単語の意味は理解できるが，それらが共起して生じたときの意味を知らなければ，正しく回答することはできない。

オノマトペも，動詞との共起制限の強い表現である。たとえば,「げらげら」は通常,「笑う」とともに用いられる。仮に,「げらげら」が「笑う」以外の動詞，たとえば「泣く」と一緒に使われたならば，それは誤用とみなされるであろう。また,「げらげら」が「笑う」のみと共起するのに対して,「しくしく」は,「泣く」と「痛む」の２つの動詞と頻繁に共起する。本研究の刺激は,「げらげら」のように意味または用法が１つしかないと想定されるものと,「しくしく」のように２つ以上あるものとの２グループから構成し，計 30 種類を選択した。

慣用句やオノマトペ以外に動詞との共起制限の強いものとして，結果・様態の副詞が挙げられる。たとえば，様態の副詞「まっすぐ」は，「歩く」や「切る」などとは一緒に使えるが，「食べる」や「寝る」などとは使えない。さらに，目的語が限定された場合には共起制限はさらに強まり，「太郎が道をまっすぐ」の後に続く表現は，「歩いた」や「走った」のような限られた動詞である。したがって，文理解において，副詞の「まっすぐ」が次に来る動詞を予測する手助けとなっている可能性がある。このような結果・様態の副詞を 40 種類，刺激として選択した。

このデータに基づいて，学習者の共起表現の習得に深く関わる知識や能力がどのようなものであるかを分析した。まず，３種類の共起表現の理解における学習歴１年終了次と２年終了次との差について，*t* 検定を行った。次に，共起表現と学習歴の関係を，３(共起表現の分類)×２(学習歴)の分散分析によって分析した。さらに，３種類の共起表現と４種類の語彙知識の因果関係について，SEM を用いて検討した。語彙知識の分類が語種(和語，漢語，外来語，機能語)と品詞(名詞，動詞, 副詞･形容詞, 機能語)の２種類あるので，分析は２回行った。最後に，３種類の共起表現と３分類の文法知識(形態素変化, 局所依存, 構造の複雑性)の因果関係を SEM で分析した。

４．研究成果

本研究の実施初年度に当たる平成 20 年度に実施した日本語の総合的テストの結果，慣用句には語彙知識の影響が認められた。それに対してオノマトペは語彙とは直接の影響は見られず，慣用句の影響が見られた。つまり，語彙→慣用句→オノマトペという順序での影響関係が見出された。この結果について，また SEM による日本語習得研究の分析手法に関して，研究代表者がワークショップを企画し，この手法を広めるとともに様々な専門分野の聴衆からコメントを得た。韓国語については，コーパスを利用してオノマトペと共起する動詞を調査した。平成 21 年度には，中国の西安外国語大学および天津外国語大学において，中国人日本語学習者を対象として，語彙知識・文法知識・共起表現・聴解・読解の総合的日本語能力テストを実施した。最終年に当たる平成 22 年度には，前 21 年度に実施したテストのデータ整理および解析を行った。その成果の一部を論文に投稿した。それらのうち，日本語母語話者による共起表現の使用実態に関する成果は，日本言語学会の査読付き学術誌『言語研究』に採択された。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

1. 大和祐子・玉岡賀津雄 (2011, 印刷中). 日本語の読みにおける外来語を介した英語知識の影響: 中国語を母語とする日本語学習者の場合. *レキシコンフォーラム*, 6. 査読有
2. 玉岡賀津雄･木山幸子･宮岡弥生 (2011, 印刷中). 新聞と小説のコーパスにおけるオノマトペと動詞の共起パターン. *言語研究*, 139. 査読有
3. 木山幸子･玉岡賀津雄 (2011, 印刷中). 自他両用の「－化する」における自動詞用法と他動詞用法の比較: 新聞コーパスの用例に基づく多変量解析, *言語研究*, 139. 査読有
4. Koizumi, M., & Tamaoka, K. (2010). Psycholinguistic evidence for the VP-internal subject position in Japanese. *Linguistic Inquiry*, 41, 663-680. 査読有
5. 柴崎秀子 ・玉岡賀津雄 (2010). 国語科教科書のテキストを基にした小・中学校の学年基準判定式の構築. *日本教育工学会論文誌*, 33(4). 449-458. 査読有
6. 小森和子・玉岡賀津雄(2010). 中国人日本語学習者の同形類義語の認知処理. *レキシコンフォーラム*, 5, 165-200. 査読有
7. Tamaoka, K&Taft M.(2010).The sensitivity of native Japanese speakers to On and Kun kanji readings.*Reading and Writing*,23,957-968.査読有
8. 玉岡賀津雄・邱學瑾・宮岡弥生・木山幸子 (2010). 中国語を母語とする日本語学習者によるかき混ぜ語順の文理解—聴解能力で分けた上位・中位・下位群の比較—. *日本語文法*, 10(1), 1-17. 査読有
9. Tamaoka, K., & Ikeda, F. (2010). Whiskey, or Bhiskey?: Influence of first-element and dialect region on sequential voicing of shoochuu. *言語研究*, 137, 65-80. 査読有
10. Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S.(2010).Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*,20, 23-45.査読有
11. Tamaoka, K., Ihara, M., Murata, T., & Lim H. (2009). Effects of first-element phonological-length and etymological -type features on sequential voicing (rendaku) of second elements. *Journal of Japanese Linguistics*, 25, 17-38. 査読有
12. Ihara, M., Tamaoka, K., & Murata, T. (2009). Lyman's law effect in Japanese sequential voicing: Questionnaire-based nonword experiments. *Collection of the papers selected from the 18th International Congress of Linguists*, 1007-1018. 査読有
13. 宮岡弥生・玉岡賀津雄・林炫情・池映任 (2009). 韓国語を母語とする日本語学習者による漢字の書き取りに関する研究—学習者の語彙力と漢字が含まれる単語の使用頻度の影響—. *日本語科学*, 25, 119-130. 査読有

14. Tamaoka, K., & Makioka, S. (2009). Japanese Mental Syllabary and Effects of Mora, Syllable, Bi-mora and Word Frequencies on Japanese Speech Production. *Language and Speech*, 52, 76-109. 査読有
15. 玉岡賀津雄・林炫情・池映任・柴崎秀子 (2008). 韓国語母語話者による和製英語の理解.レキシコンフォーラム, 4,195-222.査読有
16. 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子 (2008). 中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理―同形類義語と同形異義語を対象に―. *日本語科学*, 23, 81-94. 査読有
17. Tamaoka, K., Meyer, P., Makioka, S., & Altmann, G. (2008). On the dynamics of the compounding of Japanese Kanji with common and proper nouns. *Journal of Quantitative Linguistics*, 15, 136-153. 査読有

〔学会発表〕（計 54 件）

1. 玉岡賀津雄(2011). アクセントの認知と聴解―日本人英語学習者による英単語の強弱アクセントの知覚と聴解の関係. 2011 年 2 月 19 日. 福井県国際交流協会専門研修講座. 福井県立国際交流会館. 招待講演
2. 朴ソンジュ・玉岡賀津雄・李在鎬 (2010). 韓国語漢字語の-hada 付加による動詞および形容詞化の動作性アスペクトによる予測. 2010 年 11 月 27 日. 日本言語学会第 141 回大会，東北大学. 審査有
3. 玉岡賀津雄 (2010). 中国語を母語とする日本語学習者の文処理のメカニズム. 2010 年 10 月 23 日. 第四回中日韓日本言語文化研究国際フォーラム. 大連大学, 中国. 招待講演
4. 玉岡賀津雄 (2010). 漢字語の認知処理のメカニズム. 第 29 回 JSL 漢字学習研究会, 2010 年 8 月 21 日, 名古屋大学. 招待講演
5. Tamaoka, K.,, Kiyama, S., & Chu, X.(2010). Influence of lexical and grammatical knowledge on acquisition of the ability to distinguish Japanese homophones by native Chinese speakers learning Japanese. 2010 年 6 月 27 日, 言語科学会第 11 回年次国際大会, 電気通信大学. 審査有
6. 魏志珍・玉岡賀津雄・大和祐子 (2010). 日本語のテキスト処理における視点の統一性の影響. 2010 年 6 月 19 日, 日本言語学会第 140 回大会, 筑波大学. 審査有
7. Tamaoka, K., Kiyama, S., Yamato, Y., & Tokimoto, S.(2010). Measuring understanding speed and accuracy of distinction between male and female expressions. The 18th International Conference on Pragmatics and Language Learning. 16-19, July, 2010, Kobe University, Kobe, Japan. (Poster presentation). 審査有
8. Kiyama, S., & Tamaoka, K., (2010). How do Japanese native speakers alter their responses depending on interlocutor's contradictive attitudes? The 18th International Conference on Pragmatics and Language Learning. 16-19, July, 2010, Kobe University, Kobe, Japan. (Poster presentation). 審査有
9. 大和祐子・玉岡賀津雄・初相娟 (2010). 中国人日本語学習者のテキストのオンライン読みにおける語彙と文法の知識の影響. 2010 年 5 月 23 日, 2010 年度日本語教育学会春季大会, 早稲田大学審査有
10. 玉岡賀津雄 (2010). 動詞の二重処理モデル ―日本語動詞のメンタルレキシコンの構造―. 東呉・名古屋大学共同研討會暨教學工作坊「日本語の教育研究におけるコーパスと統計の活用, 2010 年 1 月 17 日, 東呉大学,台湾. 招待講演
11. 木山幸子・玉岡賀津雄・趙萍 (2009). 中国人日本語学習者による語用論的能力の習得に関わる知識の因果関係の検討. 2009 年 12 月 13 日. 第二言語習得研究会第 20 回全国大会, 南山大学. 審査有
12. 孫猛・小泉政利・玉岡賀津雄・宮岡弥生 (2009) 中国人日本語学習者のテイルの形と意味の習得における動詞の種類，活用および文脈の影響. 2009 年 12 月 13 日. 第二言語習得研究会第 20 回全国大会, 南山大学. 審査有
13. エルヴィタ・ヴィアシー・斉藤信浩・玉岡賀津雄 (2009) インドネシア語を母語とする日本語学習者による日本語の条件表現の習得. 2009 年 12 月 13 日. 第二言語習得研究会第 20 回全国大会, 南山大学. 審査有
14. 大和祐子・玉岡賀津雄 (2009) 日本語の外来語を多く含むテキストの読みに対する英語および外来語の語彙処理の影響: 中国人日本語学習者の語彙知識との関連. 2009 年 12 月 13 日. 第二言語習得研究会第 20 回全国大会, 南山大学. 審査有
15. 林炫情・玉岡賀津雄・李在鎬 (2009) 韓国語のオノマトペと動詞の共起パターンに関するコーパスとヒトの言語産出の比較研究. 2009 年 11 月 29 日. 日本言語学会第 139 回大会，神戸大学. 審査有
16. Kiyama, S., Tamaoka, K., Takatori, Y., & Lim, H. (2009) Mechanism of multiple factors influencing responses to accusation among people of Japan, Korea, and the United States. 2009 年 11 月 29 日. 日本言語学会第 139 回大会，神戸大学. 審査有
17. 玉岡賀津雄 (2009). Amos で解き明かす: 外国語はどのように習得されるか. ワールドワイドユーザーカンファランス SPSS Directions Japan. 2009 年 10 月 22 日, 東京ドームホテル. 招待講演
18. 玉岡賀津雄 (2009). 日本語学習者による和製英語の理解, 天津外国語大学, 2009 年 9 月 24 日. 招待講演.
19. 玉岡賀津雄 (2009). 若者言葉と短縮語, 天津外国語大学, 2009 年 9 月 23 日. 招待講

演
20. 玉岡賀津雄 (2009). 日本語学習者の継続評価と分析法, 天津外国語大学, 2009 年 9 月 22 日. 招待講演
21. 玉岡賀津雄 (2009). 語彙的/統語的複合動詞に関するエントロピー (entropy) と冗長度 (redundancy) を指標としたコーパス研究: 新聞と小説の比較, 2009 年 8 月 10 日. 第 1 回台湾大学名古屋大学日本学研究国際会議シンポジウム「言語科学研究の最先端」. 名古屋大学. 招待講演
22. 玉岡賀津雄 (2009). 構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling) を使った外国語としての日本語習得研究. 東北大学文学研究科. 2009 年 8 月 5 日. 招待講演
23. 趙萍・玉岡賀津雄・木山幸子 (2009) 「のだ」と「のか」の使用・非使用に関する文法及び語彙知識の影響. 2009 年 7 月 4 日. 言語科学会第 11 回国際大会, 東京電機大学. 審査有
24. Tamaoka, K., Asano, M., Miyaoka, Y., & Yokosawa, K. (2009) Pre- and post-head phrasal parsing of canonical and scrambled Japanese active sentences measured by eye-tracking method, 2009 年 6 月 20 日. 日本言語学会第 138 回大会, 神田外語大学. 審査有
25. 酒井弘・桜木ともみ・品川恭子・除愛紅・福田倫子・小野創・玉岡賀津雄 (2009) アメリカと中国における日本語学習者の読解力・聴解力の構成要因. 2009 年 5 月 24 日. 日本語教育学会第 137 回大会, 明海大学. 審査有
26. 宮岡弥生・玉岡賀津雄・小泉政利・孫猛 (2009) 敬語の特定形・非特定形の習得に対する語彙および文法の知識の影響. 2009 年 5 月 24 日. 日本語教育学会第 137 回大会, 明海大学. 審査有
27. 趙萍・玉岡賀津雄・木山幸子 (2009). 中国人日本語学習者による「のだ」「のか」の使用条件・非使用条件の習得と日本語能力との因果関係. 2009 年 5 月 24 日. 日本語教育学会第 137 回大会, 明海大学. 審査有
28. Verdonschot, R., Tamaoka, K., Poppe, C., & Schiller, N. O.(2009). Multiple phonological representations become active when reading Japanese kanji: Cascading activation after all? The 16th Annual Meeting of the Cognitive Neuroscience Society. 21-24, March, 2009. San Francisco, U.S. 審査有
29. 玉岡賀津雄 (2009). エントロピーと冗長度を指標とした語彙的, 統語的複合動詞の比較研究. 文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築: 21 世紀の日本語研究の基盤整備」平成 20 年度公開ワークショップ（研究成果報告会）公募研究班研究発表. 東京工業大学, 2009 年 3 月 16 日. 招待講演
30. 木山幸子・玉岡賀津雄・高取由紀・林炫情 (2009). 責めに対する同意-不同意の多要因構造: 日韓米調査データから. 滝浦真人科学研究費によるワークショップ「モダリティーとポライトネスの語用論」. 麗澤大学東京研究センター, 2009 年 2 月 28 日. 招待講演
31. Tamaoka, K. (2009). Does accessing syntactic features require conceptual activations?: Word frequency effects on syntactic features of Japanese and Chinese two-morpheme compound words for verb-or-not decisions. University of Hong Kong, China. 16:00 – 17:30, February 13, 2009. 招待講演.
32. 玉岡賀津雄 (2008). AMOS による SEM 分析法入門. 第 13 回ワークショップ「SEM (構造方程式モデリング) およびパス解析を使った日本語の習得研究」(2008 年度麗澤大学言語研究センターおよび日本言語科学会の共催企画第 5 回）. 麗澤大学. 2008 年 12 月 22 日. 招待講演
33. 宮岡弥生・玉岡賀津雄・小泉政利・孫猛 (2008). 敬語知識の習得を予測する因果関係モデル. 第 13 回ワークショップ「SEM (構造方程式モデリング) およびパス解析を使った日本語の習得研究」(2008 年度麗澤大学言語研究センターおよび日本言語科学会の共催企画第 5 回）. 麗澤大学. 2008 年 12 月 22 日. 招待講演
34. 玉岡賀津雄・趙萍・木山幸子 (2008). 共起表現の習得を予測する因果関係モデル. 第 13 回ワークショップ「SEM (構造方程式モデリング) およびパス解析を使った日本語の習得研究」(2008 年度麗澤大学言語研究センターおよび日本言語科学会の共催企画第 5 回）. 麗澤大学. 2008 年 12 月 22 日. 招待講演
35. 趙萍・玉岡賀津雄・木山幸子 (2008). モダリティ表現としての「のだ」と「のか」の習得を予測する因果関係モデル第 13 回ワークショップ「SEM (構造方程式モデリング) およびパス解析を使った日本語の習得研究」(2008 年度麗澤大学言語研究センターおよび日本言語科学会の共催企画第 5 回）. 麗澤大学. 2008 年 12 月 22 日. 招待講演
36. 玉岡賀津雄・宮岡弥生・林 炫情・金秀眞・酒井弘 (2008). 中国語および韓国語を母語とする日本語学習者の日本語理解ストラテジー. 第 13 回ワークショップ「SEM (構造方程式モデリング) およびパス解析を使った日本語の習得研究」(2008 年度麗澤大学言語研究センターおよび日本言語科学会の共催企画第 5 回）. 麗澤大学. 2008 年 12 月 22 日. 招待講演
37. Tamaoka, K., & Ikeda, F. (2008) Influence of first-element and dialect region on voice-or

voiceless decision of shoochuu. 2008年11月30日. 日本言語学会第 137 回大会, 金沢大学. 審査有

38. 池田史子・玉岡賀津雄・林炫情 (2008) 山口方言の撥音と長音を含む語の算出におけるアクセント核の有無と発音持続時間に関する世代間比較. 2008 年 11 月 29 日. 日本言語学会第 137 回大会, 金沢大学. 審査有

39. Kiyama, S., Tamaoka, K., & Takiura, M. (2008) Motivations behind face-work by native Japanese speakers in conflict situations between self and other. 2008年11月29日. 日本言語学会第 137 回大会, 金沢大学. 審査有

40. 玉岡賀津雄 (2008). 実験ソフト DMDX を使った反応時間測定法入門. 第 12 回ワークショップ「実験ソフト DMDX を使った反応時間測定法入門」(2008 年度麗澤大学言語研究センターおよび日本言語科学会の共催企画第 4 回). 麗澤大学. 2008 年 10 月 20 日. 招待講演

41. 玉岡賀津雄 (2008). 日本語の漢字熟語の認知. 日本心理学会第 72 回大会シンポジウム「漢字熟語の認知: 日本語, 中国語, 韓国語の比較」. 北海道大学, 2008 年 9 月 20 日. 招待講演.

42. 玉岡賀津雄 (2008). 日本語学習者による外来語の理解. 西安外国語大学, 2008 年 9 月 10 日. 招待講演

43. Tamaoka, K., Miyaoka, Y., Wu, Y., & Duan, X. (2008) Causal relations between idiomatic/onomatopoeic understanding and lexical knowledge among native Chinese speakers learning Japanese. 2008 年 7 月 13 日. 言語科学会第 10 回年次国際大会, 静岡県立大学. 審査有

44. 柴崎秀子・玉岡賀津雄・沢井康孝 (2008) 漢字表記と平仮名表記が文正誤判断課題に与える影響—文字種による日本語リーダビリティー公式構築のための基礎研究—. 2008 年 7 月 13 日. 言語科学会第 10 回年次国際大会, 静岡県立大学. 審査有

45. Tamaoka, K. (2008). Effects of scrambling and phrase-length order in the processing of Japanese sentences, 言語科学会第 10 回年次国際大会招待シンポジウム「二重目的構文への心理言語学的アプローチ」静岡県立大学, 2008 年 7 月 12 日. 招待講演

46. 玉岡賀津雄 (2008). エントロピーと冗長度の指標を使ったコーパス共起頻度の分析. 第 10 回ワークショップ「日本語コーパスの使用法と解析法」(2008 年度麗澤大学言語研究センターおよび日本言語科学会の共催企画第 2 回). 2008 年 7 月 5 日, 麗澤大学. 招待講演

47. Ihara, M., Tamaoka, K., & Murata, T. (2008). Lyman's law effect in Japanese sequential voicing. The 18th International Congress of Linguists, 21-26, July, 2008. Korea University, Seoul, Korea. 審査有

48. 玉岡賀津雄・木山幸子・宮岡弥生 (2008) ヒトの言語産出とコーパスの頻度はどのくらい類似しているか. 2008 年 6 月 21 日から 22 日, 学習院大学. 審査有

49. 李在鎬・玉岡賀津雄・林炫情 (2008) 韓国語の話しことばと書きことばにおける音素, 音節, 音節結合の出現頻度. 2008 年 6 月 21 日から 22 日, 学習院大学. 審査有

50. 玉岡賀津雄 (2008). 和製英語. 2008 年 6 月 14 日, 華中師範大学, 武漢,中国.招待講演

51. 玉岡賀津雄 (2008). 日本語の言語理解に影響する背景要因. 2008 年 6 月 12 日, 中南財経政法大学, 武漢, 中国. 招待講演

52. 宮岡弥生・玉岡賀津雄・林炫情・金秀眞 (2008) オノマトペと動詞の共起表現の理解と語彙知識との因果関係－韓国語を母語とする日本語学習者の場合－. 2008 年 5 月 24 日から 25 日, 首都大学東京. 審査有

〔図書〕（計 2 件）

1. 玉岡賀津雄 (2010). コーパス分析の研究例３: 語彙的・統語的複合動詞の特徴についての計量的解析. 中本敬子・李在鎬・黒田航 (編)『新しい認知言語学研究法入門』: 184-199. 東京: ひつじ書房.

2. 松岡知津子・玉岡賀津雄・酒井弘 (2009). アスペクトによる漢字二字熟語のサ変複合動詞化に対する予測. 由本陽子・岸本秀樹 (編), 『語彙の意味と文法』 (pp.121-137). 東京: くろしお出版.

〔その他〕

ホームページ等

http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ktamaoka/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者

玉岡　賀津雄（TAMAOKA, Katsuo）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：70227263

(2)研究分担者

宮岡弥生（MIYAOKA, Yayoi）
広島経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：10351975

林炫情（LIM, Hyonjong）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：30412290

酒井弘（SAKAI, Hiromu）
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：50274030

(3)連携研究者　　なし